コータン語『法華経綱要』の研究

片　山　由　美

0　問題の所在

中央アジアに位置するコータン（于闐）で出土したコータン語の仏典には、『首楞厳三昧経』（*Śūraṅgamasamādhisūtra*）、『金光明経』（*Suvarṇabhāsottamasūtra*）、『薬師経』（*Bhaiṣajyaguruvaiḍūryaprabharājatathāgatasūtra*）等の大乗経典がありこれらは梵語仏典も出土している。また、『大無量寿経』（*Sukhāvatīvyūhasūtra*）、『僧伽托経』（*Saṅghāṭasūtra*）、『維摩経』（*Vimalakīrtinirdeśasūtra*）等のコータン語訳が知られている。梵本『法華経』（*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*）には、ネパール系、ギルギット系、中央アジア系の写本があるが、中央アジア系の写本の中でも所謂「カシュガル写本」と呼ばれるものはコータン周辺の遺跡から発掘されたものがカシュガル経由で西欧に知られたため誤って命名されたものである。コータンにおいて『法華経』が篤く信仰されていたことはカシュガル写本に見られるコータン語混じりのコロフォンにコータン人の寄進者の名前が記されていることやコータン語による『法華経』の回向・発願文の貝葉の発見によって裏付けられる。しかし、他の大乗経典と異なり『法華経』のコータン語訳の写本は発見されておらず、61行の韻文からなる『法華経綱要』とその断簡が発見されている。この『法華経綱要』の唯一の翻訳は、コータン語文書の最高権威者であるサー・ハロルド・ウォルター・ベイリー（Sir Harold Walter Bailey）教授によってなされた英訳である。1971年ベイリー教授は日本に招聘され、立正大学にて『法華経綱要』の講演を行い、その資料（Bailey［1971b］）を贈呈された。しかし、『法華経綱要』の内容の検討はその後なされることはなく同テクストの意義が充分見いだされているとは言いがたい。

本稿の目的は、コータンにおける『法華経』の受容の在り方を確認した上で、Bailey［1971b］を再考することによりコータン語『法華経綱要』が『法華論』の直接的或は、間接的な影響を受けていることを明らかにすることである。

1　コータンにおける『法華経』の受容[(1)]

コータンはシルクロードの一つの西域南道沿いにあった仏教王国である。『高僧法顕伝』一巻において「于闐」について詳細な記述があり、当地で多くの僧侶が大乗仏教を学んでいたことが記されている。また、玄奘は644年中国への帰途にコータンを訪問し『大唐西域記』の中で

「瞿薩旦那国」では大乗仏教が盛んで、王国も仏教を尊重していることを書き残している。[2] さらに、梵語仏典に関する学識が蓄積され、国家をあげて熱心な仏教国であったコータンはインドで仏教が廃れてからはインド仏教の一種の聖地であり、「最後の砦」の役割を果たすことになったということも指摘されている。[3]

コータン語は中期イラン語の一つとされ、この言語はまた、前2世紀に西北インドに侵入し、王朝を立てて支配したサカ族の言語と密接な関係があったとされ、広い意味でのサカ語の一種として「コータン・サカ語」（Khotan Saka, Khotanese Saka）と呼ばれることもある。通例これを新古の2相に分け、「古コータン語」（Older Khotanese）、「新コータン語」（Later Khotanese）と呼んで区別する。[4] また、コータン・サカ語の写本の内容は多岐にわたるが、当時中央アジア仏教の一大中心地であったことが窺える多種多様な文献が残っている。仏典のコータン語訳は5世紀に始まると考えられ、それ以後10世紀までコータン語仏典は翻訳され書写された。8世紀以降の仏典は新コータン語で書かれている。また、現存するコータン語文献は、出土地の明らかなものは、コータン周辺からエンデレに至る遺跡から発掘されたものと、敦煌出土のものに2分される。敦煌出土写本とそれ以外を比較すると、外形的には前者はより保存状態がよいが、後者は破損の激しい断片類が多いと言われている。古コータン語経典の写本はコータン周辺の寺院遺跡に集中している。さらに、吉田［2010:184］は敦煌で出土する新コータン語文献は10世紀のものであり、内容は実に様々であるが大きく次の2種に分類されることを指摘する。[5]

（1） 仏教の聖地でもあった敦煌千仏洞蔵経洞に奉納された仏典

（2） 両国の間の外交使節になったコータン官人や僧侶が敦煌滞在中に、漢文仏典の紙背を利用して書き残した手慰みのようなもの

(1)が巻子本で表に漢文仏典が見られないもの、貝葉本、冊子本であるのに対し、(2)の特徴は、巻子本で表が漢文仏典であるものという点にある。なお、諸々のコータン語仏教文献についてはEmmerick［1992］や熊本［1985］がまとめている。この中で仏教文献に限定して、（A）古コータン語と（B）新コータン語に分けると次のようになる。

（A）

『金光明経』（*Suvarṇabhāsottamasūtra*）

『僧伽托経』（*Saṅghāṭasūtra*）

『首楞厳三昧経』（*Śūraṅgamasamādhisūtra*）

『維摩経』（*Vimalakīrtinirdeśasūtra*）

『大無量寿経』（*Sukhāvatīvyūhasūtra*）

『理趣経』（*Adhyardhaśatikāsūtra*）

『薬師経』（*Bhaiṣajyaguruvaiḍūryaprabharājatathāgatasūtra*）

『法身経』（*Dharmaśarīrasūtra*）

『出生無辺門陀羅尼』（*Anantamukhanirhāridhāraṇī*）

『智炬陀羅尼』（*Jñānolkadhāraṇī*）

Karmavibhaṅga

『ザンバスタの書』（*Zambhasta*）[6] コータン撰述仏教教訓詩

（B）

『金剛般若経』（*Vajracchedikāsūtra*）

『般若心経』（及び疏）（*Hṛdayasūtra*）

『無量寿宗要経』（*Aparimitāyuḥ sūtra*）

『普賢行願讃』（*Bhadracaryādeśanā*）

『賢劫経』（*Bhadrakalpikasūtra*）

『善門陀羅尼経』（*Amṛtaprabhadhāraṇīsūtra*）

『右繞仏塔功徳経』（*Pradakṣiṇāsūtra*）

『法華経綱要』（**Saddharmapuṇḍarīkasūtra-samāsa*）[7]

『法華経綱要』は（B）の新コータン語による詩頌の形のもので、その内容は『法華経』全体の内容を極度に圧縮したものであると言われている。（A）に属する古コータン語による『ザンバスタの書』第6章第3偈に『法華経』「譬喩品」第23偈が引用されていることから、古コータン語の『法華経』は1偈のみ見いだされる。[8]（A）（B）を眺めて明らかなように、種々な大乗経典がコータン語訳されているにも関わらずコータンで流布していた『法華経』が翻訳されていないのは謎であるとされる。

『法華経』がコータンで流布していたことは、コータンにおける梵本写本の発見によって知られる。カシュルガル写本と呼ばれる写本は、カシュガルの東、コータンオアシスの東の端にあるウイリク遺跡で現地の人たちが発見したものであった。この写本が書かれた頃、コータンはイラン系のコータン語を話す人たちが暮らす人口数万の小さなオアシス国家であり、王族から一般住民に至るまで熱心な仏教信者であったことは、法顕、玄奘の記録から明らかである。Lokesh Candra による編集の *Kashgar Manuscript* の序文にはカシュガル写本にあるコータン語の草書体のコロフォンと公式な書体で書かれた章末におけるコータン語混じりのコロフォンの中で寄進者の名前が記されているのが紹介されている。1993年、『法華経』を寄進したコータン人の手による願文の貝葉が公表された。この貝葉（古コータン語公式文字サイズ53.3×15cm）に記された『法華経』への願文を Emmerick and Vorobyova-Desyatovskaya［1995：68-69］におけるコータン語からの英訳を和訳して紹介する。

Success（欠損）私たちは十方、〔三世、つまり〕過去世、〔現在世、〕未来世において出現する聖なる諸仏たちに帰依する。永遠なる諸仏のご指示のために、正法の保持のために、悟り（菩提心, bodhicitta）に〔到達するための〕決意が増大するために、ここなる諸仏の前で、私は聖なる『法華経』に加護を祈る。なんであれ頭文字で（欠損）彼らは心と体と舌に委ねられており、怒りと熱情によって、〔愚行、それ故に〕私たちは〔『法華経』〕を書くようにと指示された。これら〔書写〕の徳、善根故に、私のために、輪廻のサイクル（saṃsāra）において（欠損）、善い（欠損）

次も、『法華経』の願文の貝葉（古コータン語公式文字サイズ55×17㎝）である、上と同様な形で紹介する。

（欠損）彼は（欠損）保持する（欠損）彼は、聖なる仏陀、聖マイトレーヤ〔として〕この地に生じるかもしれない。必ずや、私 Jalapuṇya は母とともに、父とともに、妻とともに、ここに来てもよいでしょうか。過去の付随（sannipāta）予言故に、姉妹、兄弟、息子達すべてと、娘たち、親戚達すべて、ともに、親類すべてはさとりへ〔導かれる〕。「私たちは仏陀になるでしょうと言われている」「誰でも私たちの弟子達になれ。彼らすべては仏陀たちになれ。時がおとずれた時、人は、人間の生を放棄しなさい。最愛の人を切望するのはやめなさい。彼らのことは嫌悪〔して〕忘れなさい。私は Jalapuṇya、死の時に、仏陀に直面する。私に光線を放って下さい。（欠損）一切衆生は〔過去の〕生をはっきりと覚えているように。彼等は『法華経』の法を理解できるように。彼は四肢をあきらめた。彼は新鮮な彼自身の皮膚をむしりとった。彼は、〔自分の〕骨を文書にした。彼等はペンを与えた。〔それ〕で一偈頌（śloka）を書いた。仏陀の〔彼の〕徳、善根が大きくなるように。誰であれ、ここ輪廻のサイクル（saṃsāra）にいるものは、（中略）悟り（欠損）そして、人々の苦悩を取り除くために、それらが必需品になれ。彼等は私をかくことがないように。いつであれこの法はここで知られるべきであり、悪趣（apāya）における人々の苦悩は消滅されるように。いつであれ、人々の塊の空間〔があり〕、まるで偉大なり吉祥（śrī）の女神のように、四大種（地水火風）のごとく、すべてのものの保持の支えとなるように。

引用の中にある Jalapuṇya や、父母、妻、兄弟等が『法華経』カシュガル本のコロフォンと一致する。コロフォンについては、各々の章末にみられ、梵語のものと、コータン語によるものと、両方が混じったものがある。

コータン語によるのは、「薬草喩品」と「涌出品」のコロフォンで次のように言われている。

『法華経』に帰命する。聖なる jalapuña 及び息子 paradatta によって書かしめられた（「薬草喩品」）

聖なる jalapuña 自らによって（中略）及び慈悲深き jalārjuna 婦人及び息子 jalarjuna 娘 jalottama 及び息子 Smaradatta 及び Dhutaka 等によって書かしめられた。（「涌出品」）

コータン語の jalapuña は梵語で Jalapuṇya である。Jalapuṇya 一族が施主となって『法華経』を書写したことが分かる。「聖なる」（mijse）という敬語が jalapuña に付されていることから彼が地位の高いものであったことが推測され、コータン地方の豪族の一人であった可能性があると真田［1976：59］は指摘している。このように Jalapuṇya という寄進者の名前が、カシュガル本の各章の終わりに記された寄進者と同じであり、先に確認した貝葉がカシュガル写本の表紙に当たることが判明した。(9) この貝葉やコロフォンはコータンにおいて『法華経』が篤く信仰されていたことを物語っている。また、カシュガル本の『法華経』はコータンのブラフミー文字で書かれており、コータンでコータン人が書写した梵語仏典は多かったと指摘されている。(10)

このように、コータンにおいて『法華経』が梵本で継承されていたと想定する Maggi［2009］の興味深い見解がある。Maggi［2009：375］はコータン語『法華経綱要』における「〔『法華経綱要』において〕経典の意味をコータン語で説いたので彼らは法の意味を理解するであろう」という一節に注目し、この一節がこれまで梵本『法華経』からコータン語に翻訳されてこなかったことを示唆しているという見解を提示している。また、『ザンバスタの書』第23章冒頭部には翻訳者の見解が次のように提示されている。『ザンバスタの書』の当該箇所のローマ字転写テクストと英訳は Emmerick［1968：342-345］によって紹介されている。Emmerick［1968：345］の英訳を要約すると次のようになる。

> 「自分は衆生のために仏教の教えをコータン語に翻訳しようと思うが、コータン人はコータン語で書かれた仏典を評価しようとしない。彼らは、梵語で説かれていても理解しないが、コータン語に翻訳すると聖なる教えではないと思う。中国でもカシミールでも仏教の教えは現地の言葉で説かれていて、よく理解されているにもかかわらず」

『ザンバスタの書』の翻訳者の言葉からコータン人がたとえ内容が理解できなくても梵語仏典に対して有り難みを抱くというコータン人の梵語仏典に対する姿勢が読み取れる。

以上のように、コータンにおいて主要な大乗経典が梵語からコータン語に翻訳されている中、梵本写本がコータンで発見されているにもかかわらず『法華経』のコータン語訳の写本が発見されていないことから、『法華経』は他の大乗経典と区別される形でコータンにおいて受容されていると考えられる。その理由を『ザンバスタの書』の翻訳者の見解と『法華経』の願文の貝葉から推測すると、梵本『法華経』に対する畏敬の念から意図的にコータン語訳しなかったというひとつの解釈可能性を見いだすこともできる。

2 『法華経綱要』

2.1 研究史

『法華経綱要』のみならず、サンスクリット語を含むインド・イラン語派の研究に貴重な資料を提示し、大量のコータン・サカ語の文献を出版、翻訳、解説する偉大な功績はベイリー教授のものである。唯一のコータン語『法華経綱要』の研究としてあげられるのは一連の Bailey［1971a］［1971b］［1972］である。Bailey［1971b］は、転写テクスト、同英訳、イラン語語彙、100語以上になる仏教梵語、プラークリット語からの借用語表でなる。ベイリー教授は、1971年に日本に招聘され、大正大学と立正大学で『法華経綱要』の講演を行った。Bailey［1971a］は、立正大学の当時の法華経文化研究所長の坂本日深教授がベイリー教授から贈呈を受けたコータン語『法華経綱要』のテクスト及び英訳が取りまとめられたものである。また、Bailey［1972］には、大正大学におけるベイリー教授の講義の内容が掲載されている。

なお、Bailey［1972］を金子良太氏が和訳し、辻直四郎氏によってまえがきが付された辻・金子［1971］もある。そして、Bailey［1971b］の論評をする辻［1971：120］は、それがコータン語の実習に絶好な参考書となるものであり、コータン語研究者一般にも多くの貴重な資料を提示する反面、注釈の項目には詳細な解説が少ないという難点を指摘する。

さて、コータン語『法華経綱要』について Bailey［1972］によって指摘されているのは次の4点である。

（a）『法華経綱要』は常に『法華経』の品順に随うものではない。
（b）『法華経綱要』には梵文『法華経』に無い事柄は含まれない。
（c）『法華経綱要』の重要性は『法華経』の知識がサカ民族の間にも伝わっていたことを証拠だてている点にある。
（d）テクストの文末にあるコロフォンにおける「リャウ司空」について充分な説明がないが、彼はテクスト本文中の「リャウ・ツァイ・シン」（Ḍyau tceyi-śīna）をさし、これを含む本文12～13行目は未だ完全に解釈できない。

（d）に関しては、「リャウ・ツァイ・シン」について考察した金子［1977］がある。金子［1977:127］は本文中の「リャウ・ツァイ・シン」が「劉再昇」と比定されることを指摘する。また、金子［1977］は、古くから梵文は仏教国コータンに伝えられていたが、『法華経綱要』に翻案されたのは10世紀頃、「于闐使都督劉再昇」の時代ではなかったかと推定し、P. 2782は925～982年の間に記された写本であると指摘する。(11)

金子［1977］以後、海外、国内において Bailey［1971b］の（a）～（c）の検証も含めて

『法華経綱要』の内容に関する研究は、管見する限り、これまでなされていない。

2.2 『法華経綱要』の諸写本

『法華経綱要』は次の3種の敦煌出土の写本によって知られる。3種ともブラフミー文字で書写されている。

(1)ペリオ収集品の P. 2782、1～61行であり、これは Bailey［1956：58-61］にローマ字転写され、その英訳がなされている（Bailey［1971a：6-8］［1971b：1-4］）。また(1)の P. 2782は玄奘訳『大般若波羅蜜経』巻154部分に相当し、『法華経綱要』を含むコータン文字（ブラフミー）で書かれたのはその裏文書である。P. 2782は単に『法華経綱要』一点のみからなる文書ではなく次のように5分類される。[12]

(I) コータン語『法華経綱要』1～61行
(II) 陀羅尼（梵語）62～72行
(III) コータンのブラフミー文字で表記したチベット語73～80行[13]（手紙）
(IV) コータン宮廷への報告の草稿　80～83行[14]
(V) 陀羅尼（梵語）84～86行

(I) ～ (V) の間に内容の関連性は全くない。

(2)P. 2029においても21行の詩文があり、17～21行目は(1)の末尾56～60行目に相当する。(1)と比較すると多少の異読があるのみである。[15] Bailey［1956：54-55］においてローマ字転写されている。また、P. 2782の陀羅尼部分と類似した記述が1～16行まで見られる。

(3)スタイン収集品の Or. 8212 /162の82～91行に(1)の冒頭の9行が見いだされる。Bailey［1968：5-6］にローマ字転写されたテクストが掲載されている。そして、同様のものが、*Saka Documents Text Volume 1* にローマ字転写（Bailey［1969:23］）と英訳（Bailey［1969:27］）、そして Bailey［1960］にその複写版（plate IX）が所収されている。また、Skjærvø［2002：50-51］にローマ字転写されたテクスト及び英訳が掲載されている。P. 2782と比較した際、多少、語句や綴字に異読があるが内容が大きく異なる部分はない。

以上のように3種の写本が発見されていることは原典が別にあったことを強く示唆する。また、(1)のみが61行からなっており、他の2つは断片である。また、本稿1.1ですでに確認したように、敦煌出土の新コータン語文書は10世紀のもので、奉納された仏典か手慰みの文書かの2つの可能性があったが P. 2782は、漢文仏典を紙背にした巻子本であることから、後者であると言える。

2.3 梗 概

『法華経綱要』の粗筋は次の通りである。

一乗（ekayāna）、すなわち仏陀の道について帰依し、三つの道とそれらが一として統合される秘要（rahasya）についての帰敬偈で始まる。そして、『法華経』「序品」における定型句「如是我聞。一時仏住王舎城耆闍崛山中」が語られる。そこで、世尊は七種成就、二種の甚深なる秘要を説示する。二種の甚深なる秘要とは、三つの道の秘要とそれらの一つとしての涅槃の都市の秘要である。「火宅の譬喩」、「雲雨の譬喩」、「化城の譬喩」、「宝珠の譬喩」、「穿井の譬喩」、「医師の譬喩」について言及される。仏弟子たちで固有名詞が挙げられているのは、カウンディヌヤ、ラーフラ、アーナンダ、プールナのみであり、彼ら大声聞が授記される。ダルマラージカ仏塔（dharmarājika-stūpa）が突然出現し、諸仏、諸菩薩がこれをみるために参集する。仏陀は入涅槃に近づいたことを告げる。また〔梵本〕『法華経』では詳細に語られるが、コータン語〔『法華経綱要』〕においては極めて簡潔に説かれていると語られる。仏陀は「デーヴァダッタ」（Devadatta）についてふれ、薬王菩薩をはじめとする菩薩達や、常不軽（Sadāparibhūta）菩薩の苦行、如来に香身供養を捧げた一切喜見（Priyadarśana）菩薩、不可思議を示現した妙音（Gadgadasvara）菩薩、観世音（Lokeśvararāja）菩薩、慈悲を授けた妙荘厳（Śubhavyūha）菩薩について語り、普賢（Samantabadra）菩薩の如く開眼させられたことを語る。『法華経』の功徳について述べられ、大河と大海との譬喩が語られ、広大なる『法華経』の妙味が一切衆生に普遍する、即ち一味の教義（ekarasa）であることが語られる。「この経典を学び、読誦するものは来世その生を浄められた国土（pariśuddi-kṣetra）に受ける」という文句で終わる。

2.4 『法華経綱要』とカシュガル本[16]

『法華経綱要』と『法華経』カシュガル本を比較した結果、以下のような明確な類似点と相違点が見られた。

(I) Bailey［1971b］の示す61行の行番号における4行目（「序品」相当部）の“ttyāṃ hālai hauda padya saṃpattä hve”という一節に注目したい。この一節の主語は省略されているが、3行目にある「偉大なる師」（mahāśāstāri, mahā-śāstṛ）、つまり「世尊」（bhagavat）である。「彼らに対して」（ttyāṃ hālai）における「彼ら」（ttyāṃ）とは、直前で語られる「霊鷲山（gridhikūṭa, *gṛdhrakūṭa）の頂上にいらっしゃる偉大な聖仙（mista rraṣayi, *mahāṛṣi= 阿羅漢）、比丘サンガ（ga, *bhikṣu-saṃgha）、比丘尼サンガ（bisaṃgīṃjai, *bhikṣṇī-saṃgha）に囲まれた（karvīna）数（phara）千（ysāra）の非常に高貴（uvāra, *udāra）な菩薩達（baudhasatva, *bodhisattva）」を指す。そして、世尊が説示すると語られる内容は、hauda padya saṃpattä、梵語に還元すると saptasaṃpatti、漢訳で想定されるのは「七種成就」である。「序品」相当部は Or. 8212 /162所収の断片があるが、同テクストも86行目に同様に「〔世尊が〕彼らに七種成

就（*saptasaṃpatti）を語られた」（Bailey［1969:23］ttyāau hālai hauda padya saṃpattä hvai）と言われている。Bailey［1961：52］は7種が何であるか明らかでないとするが、『法華経』「序品」で見られる「七種成就」で想起されるのは、『法華経』「序品」を分析してそこに7種類の功徳の成就が説示されていると解釈している『法華論』である。

（II）『法華経綱要』の「方便品」相当部（5行目）において「二種の（dve, *dvaya）甚深なる（gambīra, *gambhīra）秘要（rrihāsa, *rahasya）」について語られている。2種とは、「三とそれらの一つである涅槃の都市」（drayi vari śāṃ-tt-ū nirvāṇva kaṃtha）である。これは、帰敬偈で語られた「三つの道と一としてのそれらの統合」（drayi paṃdāv-ū haṃgrath-ūṃ śau）の言い換えだと理解できる。ここで「三つの道」（drayi paṃdāv）が「三乗」（*triyāna）、「一としての〔三乗の〕統合」（ū haṃgrath-ūṃ śau）が「一乗」（*ekayāna）を意図していることは言うまでもない。つまり「二種甚深の秘要」のうちの1つ目は、「三乗」としての秘要であり、2つ目は三乗が一つに収斂されることから、一乗に包摂される方便としての「涅槃の都市」（nirvāṇva kaṃtha）の秘要である。「涅槃の都市」（nirvāṇanagara）は「涅槃の都城」（nirvāṇapura）であり、「化城の譬喩」が意図されていると考えられる。

（III）『法華経綱要』の中で語られる譬喩は、「火宅の譬喩」「雲雨の譬喩」「化城の譬喩」「宝珠の譬喩」「医師の譬喩」「穿井の譬喩」である。

（IV）「五百弟子受記品」に相当する部分（16～17行目）の「宝珠の譬喩」について『法華経綱要』では「仲間とともに眠っている人の衣の中央に非常に貴重な宝石が縫い込まれているように、声聞達にはこの仏種姓が〔結びついて〕いる」と解釈している。この譬喩部分に関しては、カシュガル写本も同様なことを語る。[17] しかし、後半の「声聞達には（ṣāvāṃ, *śrāvaka）この仏種姓（baysūñi gautträ, *buddhagotra）が結びついている」という部分は『法華経綱要』独自な部分である。このように、声聞にも仏種姓がある、つまり仏になる可能性があることが強調されている。

（V）本稿2.1で示したBailey［1972］の4つの指摘のうちの（a）は『法華経綱要』は『法華経』の品順に従うものではないという指摘であったが、冒頭部と後半部はカシュガル本と比較するとほぼ章の配列が等しいと言える。とくに後半部分においては配列が非常に類似している。筆者が『法華経綱要』の内容からカシュガル写本のどの章について言及しているかを推定すると次のようになる。ローマ数字はカシュガル本の章番号を指す。

（帰敬偈）（1）「序品」→（2）「方便品」→（3）「譬喩品」→（5）「薬草喩品」→（8）「五百弟子受記品」（500人の声聞の受記）→（7）「化城喩品」→（8）「五百弟子受記品」（「衣裏繋珠の譬」）→（9）「授学無学人記品」→（10）「法師品」→（11）「見宝塔品」→（12）「提婆達多品」→（15）「従地涌出品」→（14）「安楽行品」→（13）「勧持品」→（16）「如来寿量品」→（18）「随喜功徳品」→（19）「法師功徳品」→（20）「常不軽菩薩品」→（21）「如来神力品」→（22）「陀羅尼品」→（23）「薬王菩薩本事品」→（24）「妙音菩薩品」（25）「観世音菩薩普門品」→（26）「妙荘厳王本事品」→（27）「普賢菩薩勧発品」→（28）「嘱累品」[18]

（I）～（V）のうち、カシュガル本に含まれないのは（I）、（II）、（IV）である。このことから、Bailey［1982］の（b）『法華経綱要』は梵文『法華経』にない事柄は含まれないという指摘は再考すべきであると言える。（I）における『法華経綱要』中の「七種成就」は『法華論』で解釈されている。

3 『法華論』

世親（Vasubandhu）が著したと伝えられる『法華論』は今日、インド撰述による唯一の『法華経』の注釈書とされる。しかし現存するのは2種類の漢訳のみである。一つは、菩提流支（Bodhiruci, 菩提流支）による『妙法蓮華経憂波提舎』、もう一つは勒那摩提（Ratnamati, 勒那摩提）による『妙法蓮華経論憂波提舎』である。本稿では通称の名を用いて『法華論』と呼び、菩提流支訳を用いる。そしてその内容はそれぞれの文句を逐語解釈しているのではなく、「序品」における「七成就」、「方便品」における「五示現」、「譬喩品」における「七喩」などの独自の視点から経典の解釈が施されている。内容は『法華経』の詳細な注釈ではなく、『法華経』の主要な文に対する注釈であり、『法華経』諸品の繋がり具合を簡潔に示すことに重点がおかれている。[19]

3.1 『法華論』の「七種成就」

『法華論』の冒頭部分における『法華経』「序品」における注釈部分で「此の経の法門の初めの第一品は七種の功徳の成就を示現す」と語られる。具体的に7種は次のように説明される。[20]

（1） 序の部分という特性の完成
（2） 教えを聴聞しようと集まっている人々という特性の完成
（3） 如来が法を説こうとする時が来ているという特性の完成
（4） あることに依拠して説法し、厳かな振る舞いに準拠して維持しているという特性の完成

(5)　法を説く原因が衆生に依っているという特性の完成
(6)　法を聞きたいという望みが大衆に現れているという特性の完成
(7)　文殊師利菩薩が答えているという特性の完成

『法華論』においては、「序品」の中に上の7つの功徳の成就が説示されていると説明されている。『法華論』の末尾においても、再び「序品」で「七種功徳成就」が示現されていることが述べられている。[21] この「七種功徳成就」は前節でも確認したようにカシュガル本をはじめとする梵本には見られないタームであり、『法華論』において最初に用いられたタームである。

3.2 『法華論』における「二種甚深」

『法華論』において「序品」の注釈の次に「方便品」冒頭部における注釈が始まる。「方便品」冒頭部における「仏智」(buddhajñāna) が甚深 (gaṃbhīra) であるという経典の文句における「甚深」(gaṃbhīra) が次の2種類に分けられる。[22]

(1)　証の甚深（さとりの甚深さ）—諸仏の智慧が甚深無量
(2)　阿含の甚深（教説の甚深さ）—智慧の門が甚深無量

『法華経』は仏の智慧の甚深さ、つまり上の(1)について述べている。しかし注釈においては(2)における教説の甚深さについても語られている。『法華経綱要』では秘要とともに「二甚深」が強調されている。1つ目の「三つの道」に関しては、(2)における教説の甚深さに関連し、2つ目の「涅槃の都市」に関しては、(1)の仏の智慧を衆生に獲得せしめる過程において方便の涅槃を設定するという、仏の智慧の甚深さを語っているものと考えられる。[23]「涅槃の城」(nirvāṇapura) に対する『法華論』の注釈は、「方便もて涅槃の城に入らしむるが故なり。涅槃の城とは、所謂、諸々の禅と三昧との城なるが故なり。彼の城を過ぎ已りて、然る後に大涅槃の城に入らしむるが故なり」とある。[24] つまり、「一乗」である「大涅槃」に到達するための方便として設定されるのが「涅槃の城」である。『法華経綱要』では甚深であるが故に秘要であるという点に重点が置かれていると考えられるが、『法華論』の「二甚深」という注釈の影響を受けて甚深なる秘要を2種類に区分した可能性も考えられる。[25]

3.3 『法華論』の「七喩」

『法華経』の中に説かれた譬喩を「七喩」として整理している点に『法華論』の特徴がみられる。[26]「七喩」は7種の増上慢心を対治するために説かれていると解釈されている。以下に「七喩」とそれに対応する7種の増上慢心を対応させて挙げる。

(1) 「火宅の譬喩」（「譬喩品」[27]）→勢力を求める人
(2) 「窮子の譬喩」（「信解品」[28]）→声聞の解脱を求める人
(3) 「雲雨の譬喩」（「薬草喩品」[29]）→大乗の人
(4) 「化城の譬喩」（「化城喩品」[30]）→定有る人
(5) 「宝珠の譬喩」（「五百弟子受記品」[31]）→定無き人
(6) 「髻中明珠の譬喩」（「安楽行品」[32]）→功徳を集める人
(7) 「医師の譬喩」（「如来寿量品」[33]）→功徳を集めない人

以上が「七喩」である。『法華経綱要』ではこのうち(1)、(3)、(4)、(5)、(7)が取り上げられている。

3.4 『法華論』における「仏性」

『法華論』にはカシュガル写本には見られない「仏性」というタームが4回使用されている。(1)は「方便品」中、(2)は上にあげた「七喩」の注釈中、(3)は「常不軽菩薩品」の注釈部分で「衆生は皆仏性を有することを示現す」という形で使用されている。(4)は「法師品」中の「穿井の譬喩」の中で使用され、譬喩の中の「水」が「仏性」をさすとする。

(1) 「諸の声聞と辟支佛と佛の法身の平等なり。経の如く「衆生に仏の智慧に基づく見解を教示しようと願うがゆえに、世に出現する」などとあるように。法身という点において等しいとは仏性、法身は差別がないからである[34]」
(2) 「このような、三種類の煩悩のない人は思い込みによって自他の身の所作の区別を見、自他の仏性法身がすべて平等であることを知らないゆえに、すなわち、この人（＝煩悩の無い人）の「私がこの法を現等覚した。他の人は現等覚しない」という、それを対治するために、〔仏は複数の〕諸声聞に授記すると知られるべきである[35]」
(3) 「菩薩による授記は、下の常不軽菩薩品において説示される通りに知られるべきである。礼拝し、讃嘆し、「私はあなたがたを軽んじません。あなたがたは仏となるでしょう」とこのような発言をしたのは、有情にみな仏性があるということを示すためである[36]」
(4) 「心にはっきりと、水は近いと知るであろう」とは、この『〔法華〕経』を受けて保持すれば、仏性という水を得て無上の正しいさとりを成就するということである[37]」

(2)に見られる「仏性法身」における「仏性」が『大乗荘厳経論』（*Mahāyānasūtrālaṃkāra*）の「仏種姓」（buddhagotra）に対応することが大竹［2011］によって指摘されている[38]。ただ

し、大竹［2013：99］は「仏性法身」という表現がインド仏教にはなく翻訳の際に不適切に加えられた可能性についても言及している。そして、世親作菩提流支訳『十地経論』巻十の経文に「仏性」とあり、梵文『十地経』（*Daśabhūmikasūtra*）に「仏種姓」（buddhagotra）とあることを根拠に『法華論』における「法身仏性」における「仏性」も buddhagotra であると指摘している。[39] 上の(3)の用例から、衆生はみな仏になる可能性があるという意味で「仏性」があると語られていることが分かる。大竹［2011：145］の指摘に従ったならば、本稿2.4.（IV）で確認したように『法華経綱要』においては、「宝珠の譬喩」の場面で声聞もまた仏に可能性があるという意味で「仏種姓」（buddhagotra）という語が使用されていることから両者の共通点が見いだせる。

3.5 『法華論』後半部の品配列

『法華論』の後半部を取り上げる。後半部においては、「修行力」について次の5つの示現（「五門示現」）が挙げられる。[40]

(1) 「説法力」→「如来神力品」（広長舌）
(2) 「行苦行力」→「薬王菩薩本事品」（捨身供養）「妙音菩薩品」（衆生教化）
(3) 「護衆生諸難力」→「観世音菩薩普門品」「陀羅尼品」
(4) 「功徳勝力」→「妙荘厳王本事品」（二童子過去世功徳善根）
(5) 「護法力」→「普賢菩薩勧発品」「後品」

「如来神力品」、「薬王菩薩本事品」、「妙音菩薩品」、「観世音菩薩普門品」、「陀羅尼品」、「妙荘厳王本事品」、「普賢菩薩勧発品」、「後品」の順序で、修行の5つの力が挙げられている。「後品」とは、「嘱類品」をさす。『法華経綱要』では「普賢菩薩勧発品」の後に「後品」とも考えられる内容が見られる。また、『法華論』同様、「如来神力品」における「広長舌」についてふれ、「薬王菩薩本事品」における苦行、つまり捨身供養について述べ、妙音菩薩、観世音菩薩、妙荘厳王菩薩、普賢菩薩について語られる。この後半七品（「如来神力品」、「薬王菩薩本事品」、「妙音菩薩品」、「観世音菩薩普門品」、「妙荘厳王本事品」、「普賢菩薩勧発品」、「嘱類品」）の『法華経綱要』の簡略化した導入の仕方は『法華論』における『法華経』後半部の導入の仕方と類似していると考えられる。

3.6 『法華経綱要』と『法華論』との5つの共通点

『法華経綱要』と『法華論』の共通点をまとめると次のようになる。

(1) 「七種成就」（七種功徳成就）が「序品」相当部の両文献で取り上げられる。

(2) 『法華論』において二甚深という注釈が施され、『法華経綱要』においては二つの甚深なる秘要（rahasya）について語られている。

(3) 『法華論』における「七喩」の中の5つの譬喩が『法華経綱要』で取り上げられている。

(4) 成仏する可能性を持っているという意味で仏種姓（buddhagotra）という語が両文献で使用されている。

(5) 冒頭部及び末尾における構成順序が類似しており、とくに後半7品の簡略化した導入の仕方が両文献に共通している。

5つの項目のうち、カシュガル本には見られず注釈書独自なものは、(1)、(2)、(4)である。とくに、(1)における『法華論』において注釈家が読み取った解釈内容を世尊の説示内容として『法華経綱要』の中で取り込んでいるということは、コータンにおいて『法華経』が『法華論』の注釈に基づいて解釈されていた可能性を示唆するものである。

『法華経綱要』にみられる『法華論』からの影響に基づいて、コータンにおける『法華経』理解にその注釈書が深く関与している可能性が高いことを指摘した。次に、参照されていたであろう『法華論』が梵文であるか、漢訳されたものであるかという点について若干の考察を加えたい。コータンにおける『法華経』の受容の在り方は他の大乗経典とは異なった在り方、つまりコータン語訳されずあえて梵本で伝承されていた可能性が高いという点にその独自性がみられた。そして、この受容の在り方を念頭におくと、カシュガル本をもとにして『法華経綱要』が作成されたと考えられる。するとそれを解釈するための注釈書が漢訳された『法華論』であると推定するのは困難であると言わざるをえない。コータン人が梵本『法華論』の写本を入手していた可能性は、インドから中央アジアを経て中国へと伝播していていく過程においてコータンの地理的環境やその他、多数の梵本写本がそこで発見されている状況から充分考えられる。ただし、梵本『法華論』の写本が発見されていない状況化でこれ以上考察を進めることはできない。従って、次に想定される漢訳『法華論』の影響を『法華経綱要』が受けている可能性について探りたい。

4 漢訳『法華論』

P. 2782が10世紀の敦煌出土の写本であることから、中国仏教からの影響を完全に無視することはできない。まずは『法華経』に限定せず、コータン語仏教文献における漢訳仏典からの影響についてまとめておく。吉田［2003］によると、敦煌出土文献 Ch. 00120, P. 5597は漢文の『金光明経』の裏に、コータンのブラフミー文字（草書体）で表記された漢文仏典である、漢文

『金剛般若経』にコータンのブラフミー文字で発音を書き込んだ資料が発表された。このことから、10世紀には漢文仏教の影響を受けたコータン語仏典が存在したと予測される。実際、P. 3513に見られる『金光明経』の懺悔品の翻訳は、義浄訳（と法成によるチベット語訳）に一致するといい、中国仏教の影響が認められる。また、間接的にではあるが、コータン僧侶と中国仏教との関係を窺わせる資料がある。敦煌で書かれた西域旅行者用サンスクリットコータン語会話練習帳には、「中国に行って何をするか」という質問に対して「文殊菩薩を見る」と答えており、これは中国仏教の聖地である五大山に巡礼に行くことを意味すると考えられている。

コータン語仏教文献に見られる漢文経典からの影響についてこれらの指摘があることをうけて、敦煌出土の『法華経』の注釈書の写本の発見状況を確認しておく。『法華論』は次の(1)と(2)であり、(3)は題記のみである。

(1)　勒那摩提訳本が1点［S.2504］＝大英図書館所蔵スタインコレクション
(2)　両訳混入の修治本が1点［始53］＝北京図書館（現、中国国家図書館）蔵敦煌逸書
(3)　菩提留支訳本が1点［散697］（題記のみ）＝敦煌出土とされるが、現所蔵地不明

『法華論』の引用が見られるのは、隋の天台大師（538-559）の後期時代の著作とされる『法華玄義』や灌頂（561-632）が天台没後に完成させた『法華文句』においてである。天台大師ではなく灌頂が『法華論』を引用したという指摘が藤井［2001:22］でなされている。『法華論』を多く引用、援用したのは三論宗の吉蔵（549-623）である。吉蔵は『法華玄論』、『法華義疏』、『法華統略』等の中で『法華論』を引用するのみならず、自らこれの注釈書（『法華論疏』三巻）を著している。また、中国法相宗においてもこれは重視され、慈恩大師基（632-862）は『法華玄賛』において『法華論』を引用、援用している。

本稿で取り上げた「七種成就」に関して『法華論』の説を引用しているのは『法華玄賛』と『法華論疏』である。

『法華玄賛』T. No. 1723.661c9-10：論説序品有七種成就。成就者具足圓滿之義。欲明序中具足七義。（論に序品を説くに七種の成就有り。成就とは具足圓滿の義なり。序の中に七義を具足することを明さんと欲す。）

『法華論疏』T. No. 1818.787a12：論曰此經法門中初第一品示現七種功德成就（論曰く此の經の法門の中の初めの第一品は七種功德成就を示現す）

また、『法華論疏』は「二種甚深」について、『法華玄賛』も「二甚深」について言及している。「佛性」というタームも当然両文献で何度も使用されている。ことに『法華玄賛』は漢訳か

らチベット訳、ウイグル訳もされており、『法華経』の注釈書の中で最も多く写本が発見されている注釈書とされる。従って、『法華経綱要』における注釈書の影響として漢訳の注釈書が関与していたと仮定した場合、『法華論』の直接的な影響だけではなく、その『法華論』を引用、援用している『法華論疏』或は『法華玄賛』からの間接的な影響である可能性も考慮しなければならない。

5 結 論

『法華経綱要』とカシュガル本『法華経』を比較検討した結果、次の2点が明らかとなった。

(1) 『法華経綱要』中の「序品」相当部分で『法華論』の解釈を世尊の説示内容としていることとその他の共通点を考慮すると、コータン人は『法華論』の注釈書に基づいて『法華経』を理解していた可能性が高いと言える。コータン語訳『法華経』の写本が発見されていない現状を考慮すると、コータン人の僧侶達の間で『法華経』はコータン語ではなく梵語で解釈され、伝承されていたことが推測できる。このことから『法華経綱要』に見られる注釈書からの影響は梵本『法華論』による可能性が考えられる。

(2) 漢訳『法華論』が関与していると想定した場合、その影響は『法華論』に限定することはできず、『法華論』を引用、援用する『法華論疏』か『法華玄賛』の影響を受けている可能性もある。

直接的な影響にせよ間接的な影響にせよ、いまだ中央アジアに『法華論』が受容されたという事例は報告されていない。従って、『法華経綱要』にみられる『法華論』からの影響は『法華論』が中央アジアにおいて受容されていたことを示す点において、『法華論』の研究にも資するものと言えよう。

略号と参考文献

Dbhū　See Kondo［1983］

KN　See Kern and Nanjio［1908-1912］

MSA　See Lévi［1983］

SP（Tib）　D No.781. P No.113. S No.141.

T.　大正新脩大蔵経

Toda　See Toda［1981］

Bailey, Harold Walter

1960　*Saka Documents, Portfolio1*. London: Percy Lund, Humphries & Co. LTD.

1965　"A Metrical Summary of the Saddharmapuṇḍarīkasūra in Gostanadeśa." *Bulletin of Tibetology* 2: 5-7.

1968　*Saka Documents Text Volume*. London: Percy Lund, Humphries & Co. LTD.

1969　*Indo-Scythian Studies being Khotanese* Texts Vol. I-III. Cambridge: The University Press.

1971a　*Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Institute for the Comprehensive Study of Lotus Sūtra*. Tokyo: Rissho University.

1971b　*Saddharmapūṇḍarīkasūtra: The Summary in Khotan Saka, Titles on Oriental Studies and Asia*. Canberra:
Australian National University, Faculty of Asian Studies.

1972　*The Khotanese Summary of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra. Memoirs of Taisho University* 57: 1-5.

Chandra, Lokesh

1977　*Saddharmapuṇḍarīkasūtra Kashigar Manuscrip*t. Tokyo: The Reiyukai.

Emmerick, Ronald Erick

1968　*The Book of Zambasta Khotanese Poem on Buddhism* (*London Oriental Series, v. 21*) London: Oxford University Press.

1974　"Some Khotanese Doors." in Ph. Gignoux and A. Tafazzoli, eds., *Mémorial. Jean de Menasce*. Louvain: Imprimerie Orientaliste.

1992　*A Guide to the Literature of Khotan (Studia Philologica Buddhica, Occasional paper series ; 3)* Tokyo: Reiyukai Library.

Emmerick, R. E. and Margarita I. Vorobyova-Desyatovskaya

1995　*Saka Documents Texts III: St. Petersburg Collections*. London: School of Oriental and African Studies.

Karashima, Seishi

2001　"Some Features of the Language of the Saddharmapuṇḍarīkasūtra." *Indo-Iranian Journal* 44: 207-230.

2005　An Old Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan: The Romanised Text Collated with the Kanjur Version(1) *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology* (*ARIRIAB*) 8: 191-268.

2006　An Old Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan: The Romanised Text Collated with the Kanjur Version(2) *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology (ARIRIAB)* 9: 89-181.

2007　An Old Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan: The Romanised Text Collated with the Kanjur Version(3) *Annual Report of The International*

Research Institute for Advanced Buddhology (ARIRIAB) 10: 214-324.

2008 An Old Tibetan Translation of the Lotus Sutra from Khotan: The Romanised Text Collated with the Kanjur Version(4) *Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology (ARIRIAB)* 11:177-302.

Kern, Hendrik and Bunyiu Nanjio

1908-1912 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra (Bibliotheca Buddhica 10)*. St. Pétersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.

Kondo, Ryuko

1983 *Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtraṃ*. Tokyo: Rinsen Book Co.

Lévi, Sylvain

1983 *Mahāyānasūrālaṃkāra (Text)*. Tokyo. Rinsen Book Co.

Maggi, Mauro

2009 "Khotanese Literature." in *The Literature of Pre-Islamic Iran (A History of Persian Literature Companion Volume 1)*, edited by R. E. Emmerick and M. Macuch. London: I.B. Tauris.

Sims-Williams, Nicholas and James Hamilton

1990 *Documents Turco-Sogdiens du IXe-Xe Siecle de Touen-houang*. London: School of Oriental and African Studies.

Skjærvø, Prods Oktor

2002 *Khotanese manuscripts from Chinese Turkestan in the British Library: A Complete Catalogue with Texts and Translations*. London: British Library.

Toda, Hirofumi

1981 *Saddharmapuṇḍarīkasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text*. Tokushima: Kyoiku Shuppan Center.

岩松浅夫

1985 「敦煌のコータン語仏教文献」『講座敦煌　第6巻　敦煌胡語文献』大東出版者（所収）

大竹晋

2011 『新国訳大蔵経14　釈経論部』大蔵出版

2013 『元魏漢訳ヴァスバンドゥ釈経論群の研究』大蔵出版

小野妙玄

1989 『国訳一切経　史伝部十六下』大東出版社蔵版

片山由美
2014　「コータン語『法華経綱要』の翻訳」『身延論叢』第19号に掲載予定
金子良太
1973　「敦煌出土未解明文書一・二に就いて」『豊山学報』17/18：142－150（1－9）.
1974　「敦煌出土張金山関係文書」『豊山学報』19：118－109
1977　「Pelliot 2782文書所見の Ḍyau Tceyi-śiṅa」『豊山学報』22：130－125.
金炳坤（慧鏡）
2013　『法華章疏の研究』（課程博士学位請求論文）
清田寂雲
1959　「ペトロフスキー本・法華經原典の特色について：序品から人記品まで」『天台宗教學大會記念號』25－32.
熊本裕
1985　「コータン語文献概説」『講座敦煌　第6巻　敦煌胡語文献』大東出版者（所収）
久留宮円秀
1976　「法華経梵本写本奥書研究ノート」『法華経信仰の諸形態：法華経研究』6：109－146.
真田有美
1958　「西域梵文法華経の一写本に就いて」『石濱先生古稀記念　東洋学論叢』石濱先生古稀記念會
辻直四郎
1971　「サカ語文書研究二種」『東洋学報』54：119－121.
張広達・栄新江
2008　『于闐史叢考』中国人民大学出版社
辻直四郎・金子良太
1971　「コータン語「法華経綱要」について」『豊山学報』16：154－130（1－25）.
寺本婉雅
1974　『于闐国仏教史の研究』国書刊行会
藤井教公・池邊宏昭
2001　「世親『法華論』訳注(1)」『北海道大学文学研究科紀要』105：21－112.
2002　「世親『法華論』訳注(2)」『北海道大学文学研究科紀要』108：1－95.
2003　「世親『法華論』訳注(3)」『北海道大学文学研究科紀要』111：11－28.
ヒニューバー，オスカル・フォン（小槻 晴明訳　水船 教義訳）
2012　「ギルギットの梵文法華経：写経と信奉者たちと工匠」『東洋学研究』51－2：186－166.

望月海慧

2006　「ツォンカパの『法華経』理解について」『法華経と大乗経典の研究』山喜房佛書林（所収）

吉田豊

2003　「イラン語圏の仏教信仰とイラン語仏典」『「古典学の再構築」研究成果報告集　II A01「原典」調整班研究報告　論集「原典」』217－235.

2010　「出土資料が語る宗教文化―イラン語圏の仏教を中心に―」『新アジア仏教史05中央アジア文明・文化の交差点』佼成出版社

〈付記〉

本稿は平成25年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。なお、身延山大学特任講師の金炳坤（慧鏡）氏からコータン語『法華経綱要』に関する資料を頂いたのがこの原稿作成の契機となった。また、国際仏教学大学院大学の藤井教公教授に紹介して頂いたコータン語に精通したDharma Drum Buddhist College助教のダンマディンナー（dhammadinna）氏や言語学者である京都大学の吉田豊教授から論考に必要な文献について、また、同じく言語学者である東京大学の熊本裕名誉教授からコータン語の翻訳に関する様々な助言を頂いた。そして、立正大学仏教学部三友健容教授からもご指導頂いた。深く感謝申し上げる。

〈キーワード〉コータン語『法華経綱要』、『法華論』、カシュガル本

注

(1)　漢文資料におけるコータンにおける『法華経』の受容に関しては僧詳の『法華伝記』において西域志を引用して「昔、于闐の王宮に法華の梵本が有り、六千五百偈」とあることから『法華経』の梵本がコータンに流伝していたことが分かる。（T. No.51.50b4.4-5：西域志云。昔于闐王宮有法華梵本。六千五百偈。）　また、チベット資料『于闐国懸史』（*li'i yul lung bstan pa*）によっても『法華経』がコータンにおいて流布していたことが分かる。これは、経証を『大釈迦牟仏像安置功徳経』（*śakya thub pa'i sku gzugs chen po bshugs pa'i yon tan mdo*）に求め、同経典（gsung）を根拠とする形式で説かれたものである。

(2)　T. No. 2085.857b3：于闐に到ることを得たり。其の國は豊樂に人民は殷盛にして盡く皆法を奉じ、法樂を以て相娯しみ、衆僧は乃ち數萬人あり、多くは大乘に學せり。皆衆食あり。彼の國は、人民星のごとくに居り、家家の門の前には皆小塔を起せり、最小の者にても高さはおよそ二丈許あるべし。四方僧房を作って客僧及び餘の所須に供給す。國主の安頓は法顯等を僧伽藍に供給せり、僧伽藍の名は瞿摩帝といふ、是れは大乘の寺にして三千の僧あり、揵搥と共に食す、食堂に入るの時は、威儀齊肅に次第にして坐す。（書き下しは小野［1989：2］による）

なお、コータン出土の古チベット訳の校訂本がKarashima［2001-2005］で提示されている。他のチベット訳と異なる点があることが指摘されており興味深いが、カシュガル本ではなくネパール系、ギルギット系梵本と近い傾向があることを辛嶋氏からご教示頂いた。この古チベット訳とコータン出土文献との関係につい

ての考察は今後の課題とする。

(3)　詳細は吉田［2003］を参照されたい。

(4)　Skjærvø［2002：Ixx］によると「古コータン語」文献はおよそ紀元後5, 6世紀、「中コータン語」文献は7, 8世紀、「新コータン語」文献は9, 10世紀頃のものとされる。

(5)　なぜコータン語文献が敦煌から出土されているのかに関しては、当時沙州（敦煌）に漢人の独立政権である曹氏帰義軍が拠っていて、コータン王家は曹氏と婚姻関係を結び政治的にも文化的にも強いつながりがあったからだとされる。（吉田［2010：80］を参照した。）

(6)　現存のコータン語文献のうち最大の分量のコータン撰述の仏教文献である。現存『ザンバスタの書』は3種の韻律による長短様々な24章からなる。Bailey が付けたこの仮題は奥書に見られるこの写本を序作、書写することを命じた役人の名による。テクスト全体は特定の原典からの翻訳と考えられず、部分的にサンスクリット、パーリ、チベット、漢文等に対応部分をもち、経典の翻訳というより既存の材料を利用してコータン独自で創作したものである。『ザンバスタの書』第6章は特異な章で60詩節が別々の経典から1偈ずつ引用されている。『法華経』以外にも『金剛般若経』と『金光明経』の引用が認められている。『ザンバスタの書』の著作年代は種々の説があるが5世紀という説がある。

(7)　『法華経綱要』の梵語名は「『法華経』の中で法は詳細〔に説明されている〕であるが、ここでは簡潔（hambista, *samāsa）に説いた」と語られていることから、筆者が便宜上付した還元梵語である。

(8)　*Zambasta* VI.3: hāma śśāriputra thu balysā ysamaśśandya ustamu kālu padmaprabhā nāma balondi pharu kūla satva parrīji

「シャーリプトラよ、未来世に、あなたは、この世界で、力強い、パドマプラバという名の如来になるでしょう。あなたは多くの衆生達を救済するでしょう」（テクストは Emmerick［1979：116］により、翻訳は Emmerick［1979：117］の英訳からの和訳である）

Toda 72b.3-4: bhaviṣyasi tvam api śāradvatīputrānāgate 'dh（v）āni tathāgato jinaḥ padmaprabho nāma（samaṃ）tacakṣur vineṣyase prāṇisahasrakoṭyaḥ

「シャーリプトラよ、お前もまた将来、パドマプラバという名の勝利者、如来となるであろう。お前は、あまねく見わたす眼をもっている故に、幾千・コーティもの命あるものを導くであろう」

チベット語訳は梵文からの直訳である。

ma 'ongs dus na sh'a ri'i bu khyod kyang //

rgyal pa de bzhin gshegs par（D, P; pa S.）'byung 'gyur te //

pad ma'i 'od ces bya ba kun tu spyan //

srog chags bye ba stong dag rnam par 'dul //

『妙法蓮華経』T. No.262.11c14：舍利弗來世成佛普智尊號名曰華光當度無量衆

『正法華経』T. No. 263.74b27-29：卿舍利弗於當來世得成爲佛顯如來尊號蓮華光普平等目教授開化

『法華経』第23偈はチベット仏教文献において、一乗思想の文脈の中で『法華経』が一乗を了義として三乗が未了義であることを示す経証として引用される。詳細は望月［2006：237］を参照せよ。『ザンバスタの書』第13章には如来蔵、一乗についての議論がなされているが経証として経典があげられてはいない。コータン仏教における一乗思想の理解について、この章の読解によって把握できると考えられる。今後の課題とする。

(9)　吉田［2003：226］を参照した。また、コータン語からの英訳が Emmerick and Vorobyova-Desyatovskaya［1995：68-69］によって紹介されている。なお、カシュガル本の『法華経』の書写は、Karashima［2001：207］によれば9世紀以降のものである。しかしコータン語学者熊本によれば、古コータン語は9世紀のチベット支配以降には書かれなくなったとする。この説は10世紀に属することが別に証明されている敦煌出土の

コータン語文献に古コータン語資料が存在しないという事実認識に基づいており説得力があり、カシュガル写本の年代は再考すべきだと吉田［2003］は言う。また、梵文『法華経』のネパール系、ギルギット系、中央アジア系の写本の奥書を総合的に研究した久留宮［1976：139］がある。その中で所謂カシュガル写本の本文中章末3カ所、及び全巻末尾に見いだされる奥書についての研究は真田［1974］があり、ペトロフスキー本の奥書にはコータン語でこの写本が書写されるについて、その法華経への信仰の立場から、援助をした一族の人々の名が挙げられていることが指摘されている。これについては、Emmerick［1974］にもコータン語の英訳とその説明がある。またギルギット写本において「法師」の名前が奥書に書かれていることがヒニューバー［2012］によって指摘されている。

(10) 詳細は吉田［2003：230］を参照せよ。

(11) 金子［1977：125］によると、P. 2782が敦煌出土後期コータン語文献である以上、李聖天治世同慶14年（925年）以降、Viśa Dharma 治世　中興5年（982年）までの年代範囲であると推定できる。『新五代史』巻9後晋出帝紀の条に「天福七年十二月丙子干闐使都督劉再昇来　沙州曹元深　瓜州曹元忠　皆遣使者附再昇以來旱蝗」とある。

(12) Sms-Williams and Hamilton［1990：39-40］、張広達・栄新江［2008：129-130］、吉田［2003：228］を参照した。なお、漢文面にはソグド語の落書きもあるが、それは「神の名において、猿の年の6月20日」と翻訳される。「神の名において」という言い回しから、この落書きがキリスト教徒によって書かれたことが推測されている。「猿」の綴りにウイグル語の影響が見られるのでキリスト教徒のウイグル商人によって書かれたのであろうが、コータン語文献との関係は不明とされる。

(13) 金子［1973：146］は、本文中の（III）の和訳を行い、（III）はコータン仏教徒が敦煌寺に到来に随喜を覚書として残したものと考えられ、手紙の形式に仮借した文であることが明らかであることを指摘する。そして、表文書の『大般若波羅蜜多経』は、9世紀初頭大量に書写された仏典であり、その反古を用いた裏文書であること、文中にチベット語の古形を止める痕跡が見いだされることから9世紀中葉にかけての年代と考えられることを指摘している。

(14) Emmerick［1992：27］は「『法華経綱要』の年代を特定するのは困難であるが、Gūmattīrai monastery, Dharmaidrākarapūña の師（ācārya）が年代を決定する一助になる」と言及している。Gūmattīrai monastery とは『高僧法顯傳』一巻の「于闐」の説明中にある「瞿摩帝」（gomati）という大乗の寺院をさすが、Dharmaidrākarapūña がどのような僧侶なのかは明らかになっていない。また P. 2782の82行目に Dharmaidrākarapūña 及び gomati という語が見られ、Or. 8212/162の155行目に同様に2語が見られる。

(15) Bailey はこの写本に関して一切言及をしていないが、Emmerick［1979：28］と熊本［1985：114］が『法華経綱要』の断片であることを指摘している。

(16) 『法華経綱要』の作成目的は12行目に「リャウ・ツァイ・シン（劉再昇）の為に最初に説かれた」（ḍyau tceyi śīṅa ūdiśāyi ttā āsṅa biraṣṭā）という文句があるように、固有名詞が詩の本文中に現れることから、これが教義的なテクストではないことが分かり、かつ『新五代史』の高居誨伝に登場する劉再昇は「都督」であるとされるが、その肩書きなしでもすぐ分かるコータン国の国王などに献呈されるべき作品であったと推測できる。また、本文中に不明な箇所があることからまだ未完成な草稿中のものである可能性もある。

(17) Toda 199b7-200a3: kaścid eva puruṣ a ḥ kasyacid eva puruṣasya mitrākulaṃ bhikṣā (da) kulaṃ praviṣṭo bhavet sacāpya mitro ma［ha］ttasya cā suptasya vā anarghamulye maṇiratnaṃ coṭāntare ābadhnīyād evaṃ c［y］āsya vadet tavaiṣa bhau puruṣa maṇiratnaṃ dattaṃ bhavitv iti

(18) Bailey［1971b:7］における『法華経綱要』と仏教梵語テクストの対応表は次のようである。なお、Bailey は『法華経』の仏教梵語テクストとして何本を使用しているのか明示していないが、ケルンの英訳を参照しているという言葉からケルン・南条本を使用していると考えられる。しかし、ケルン・南条本はネパール系

写本を使用しているため、本稿ではコータンで出土したカシュガル写本を用いて考察した。よって必然的にアラビア数字の章番号も異なる。火宅の譬喩を2章と解釈しているのはミスであると考えられるため筆者が3章と修正した。(3)→（8)→（7)→（8)→（9)→（10）→（11）→（10）→（11）→（22）→（12）→（14）→（15）→（19）→（20）→（22）→（23）→（25）→（25）→（26）

(19) Frauwallnerのヴァスバンドゥ二人説に基づいてヴァスバンドゥの作品を網羅的に整理している大竹［2013: 20-27］は『法華論』における考察の結果、大竹［2013：98-99］で以下の2点を指摘している。

現存する古師ヴァスバンドゥ（320-380頃）の著作群

『辯中辺論』『大乗荘厳経論』『摂大乗論釈』、大乗に対する諸注釈書、『百論』に対する注釈、『発菩提心論』

現存する新師ヴァスバンドゥ（400-480頃）著作群

『阿毘達磨倶舎論』『釈軌論』『成業論』『縁起論』『唯識二十論』『唯識三十頌』『五蘊論』

(1)古師ヴァスバンドゥ著作との接点については、『妙法蓮華経憂波提舎』と『大乗荘厳経論』とは方便善巧と仏種姓と六根清浄とに対し同様な注釈を与え、『妙法蓮華経憂波提舎』と『摂大乗論釈』とは声聞授記と如来蔵とに対し同様な注釈を与えている。

(2)新師ヴァスバンドゥ著作との接点については、残念ながら、筆者は未だ『妙法蓮華経憂波提舎』のうちに接点を見いだすことに成功していない。

現存する世親造『法華論』は、『大正蔵』所収のものでは菩提留支・曇林訳『妙法蓮華經憂波提舎』（二巻）、勒那摩提・僧朗訳『妙法蓮華經論優波提舎』（一巻）とあるが、『至元録』では前者を「法華經論二卷（或一卷）元魏天竺三藏菩提留支共曇林譯」、後者を「妙法蓮華經論一卷　天親菩薩造　元魏天竺三藏勒那摩提共僧朗譯」とする。以上の二訳について『至元録』は「梵云薩怛囉（二合）麻　逹怛唎迦　沙悉特囉」と記述している。『至元録』ではこの二訳について「右二論同本異譯與蕃本同」と記述している。『至元録』によると、『法華論』の蔵訳（蕃本）があったのかもしれないが、現存はしていない。

(20) T. No.1519.1a29-5b：此經法門。初第一品示現七種功德成就。此義應知。何等爲七。一者序分成就。二者衆成就。三者如來欲説法時至成就。四者依所説法威儀隨順住成就。五者依止説因成就。六者大衆現前欲聞法成就。七者文殊師利菩薩答成就

(21) T. No.1519.10b23：第一序品示現七種功德成就。第二方便品有五分示現破二明一。餘品如向處分易

(22) T. No.1519.5a10-14：諸佛智慧甚深無量者。爲諸大衆生尊重心。畢竟欲聞如來説故。言甚深者。顯示二種甚深之義應如是知。何等爲二。一者證甚深。謂諸佛智慧甚深無量故。二者阿含甚深。謂智慧門甚深無量故。

(23) T. No.1519.8c1：以三爲一令入大乘故

(24) T. No.1519.8c3-5：方便令入涅槃城故。涅槃城者。所謂諸禪三昧城故。過彼城已。然後令入大涅槃城故。

(25)『法華論』には「十七異名」が説かれている。その中の六番目に法が甚深であるから rahasya であるという説明がある。「(6)一切諸佛祕密法者（sarvabuddharahasya)」この十七異名については大竹［2011:24-125］によって整理されている。

(26) T. No.1519.8a25-8b5：次爲七種具足煩惱染性衆生。説七種喩。對治七種增上慢心。此義應知又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脱身等染慢。對治此故説三種平等。此義應知。身下丹本有見字何者七種具足煩惱染性衆生。一者求勢力人。二者求聲聞解脱人。三者大乘人。四者有定人。五者無定人。六者集功德人。七者不集功德人何等七種增上慢心。云何七種譬喩對治。

(27) T. No.1519.8b9：一者顛倒求諸功德增上慢心。謂世間中諸煩惱染熾然增上。而求天人勝妙境界有漏果報。對治此故爲説火宅譬喩應知

(28) T. No.1519.8b9：二者聲聞一向決定增上慢心。自言我乘與如來乘等無差別。如是倒取。對治此故爲説窮子譬喩應知

(29) T. No.1519.8b12：三者大乘一向決定增上慢心。起如是意無別聲聞辟支佛乘。如是倒取。對治此故爲説雲雨

譬喩應知

(30) T. No.1519.8b15：四者實無謂有增上慢心。以有世間三昧三摩跋提。實無涅槃生涅槃想。如是倒取。對治此故爲説化城譬喩應知

(31) T. No.1519.8b18：五者散亂增上慢心。實無有定。過去雖有大乘善根而不覺知。不覺知故不求大乘。狹劣心中生虚妄解。謂第一乘。如是倒對治此故爲説繫寶珠譬喩應知

(32) T. No.1519.8b22：六者實有功德増上慢心。聞大乘法取非大乘。如是倒取。對治此故爲説輪王解自髻中明珠與之譬喩應知

(33) T. No.1519. 8b25：七者實無功德増上慢心。於第一乘不曾修集諸善根本聞第一乘心中不取以爲第一。如是倒取。對治此故爲説醫師譬喩

(34) T. No.1519.7a25-27：諸聲聞辟支佛佛法身平等。如經欲示衆生佛知見故出現於世故。法身平等者。佛性法身無差別故。

(35) T. No.1519.8c20-22：如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別。不知彼此佛性法身悉平等故。

(36) T. No.1519.9a13：如下不輕菩薩品中示現應知。禮拜讃歎作如是言。我不輕汝。汝皆當得作佛者。示現衆生皆有佛性故

(37) T. No.1519.10a26-27：其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故。

(38) MSA IX.77. MSABh 48.5-8: eka eva buddha ity etan neṣyate / kiṃ kāraṇaṃ / gotrabhedāt. anantā hi buddhagotrāḥ sattvāḥ tatraika evābhisaṃbuddho nānye 'bhisaṃbhotsyanta iti kuta etat / puṇyajñānasaṃbhāravair arthaṃ ca syāt, anyeṣāṃ bodhisattvānām anabhisaṃbodhāt / na ca yuktaṃ vaiyarthyaṃ tasmād avaiyarthyād api naika eva buddhaḥ

「仏は一人のみである」という、そのことは認められない。いかなる理由からか、というならば、〔仏〕種姓がこまごまにいるからである。というのも、仏種姓の諸有情は無辺にいるのである。ここで、「一人だけが現等覚がないゆえに、〔他の諸菩薩の〕福と智との資糧は無意味になってしまう。無意味になってしまうのは妥当でない。それゆえに、無意味でないという点からも、仏は一人のみでない」（翻訳は大竹［2011：145］による）

(39) Dbhū 144.13: evaṁ jñānasvabhinirhṛtaḥ khalu punar bho jinaputra bodhisattvo buddhagotrānugato buddhaguṇaprabhāvabhāsitastathāgateryāpathacaryācāritrānugato buddhaviṣayābhimukhaḥ satatasamitaṁ

T. No. 1522.185a：佛性隨順因故。如經佛子菩薩成就得如是智慧名爲得入佛性等。是中佛性者。界滿足勝。隨順因者。三種相示現。一攝功德二行三近。

(40) T. No.1519.10a27-10b10：修行力者。五門示現。一者説力。二者行苦行力。三者護衆生諸難力。四者功德勝力。五者護法力。説力者。有三法門。神力品示現。一者出廣長 舌令憶念故。二者謂謦欬聲説偈令聞故。令聞聲已如實修行不放逸故。三者彈指覺悟衆生。令修行者得覺悟故。行苦行力者。藥王菩薩品示現又行苦行力者。妙音菩薩品示現教化衆生故。護衆生諸難力者。觀世自在菩薩品陀羅尼品示現。功德勝力者。妙莊嚴王品示現。二童子依過去世功德善根。有如是力故。護法力者。普賢菩薩品及後品示現